コアラの母

小城ゆり子

コアラの母

　新太郎にはお母さんがいない。

　家にはパパとおばあちゃんとがいる。パパはいそがしいサラリーマンで、朝早く会社に出かけ、夜おそくしか帰ってこない。新太郎とは、ほとんど土曜日や日曜日にしか顔を合わせない。だから大好きなパパがいない日は、新太郎はさびしくてならない。おばあちゃんがめんどうを見てくれるのだが、何か変なのだ。近所のお友達の家を見ると、みな、お母さんが家にいるらしいのだ。なぜ新太郎にだけお母さんがいないのだろう？

　おばあちゃんはとしよりなので、えっちらおっちら家の仕事をしている。料理もそうじもせんたくもたいへんらしい。でも、このおばあちゃん、相撲が大好きなのだ。いつもテレビで相撲を見ている。

　新太郎も相撲は好きだ。

「新太郎、お前、お相撲さんになるかい？」とおばあちゃんが聞く。

「うん」

「そうかい？　お前はきっと強いお相撲さんになれるよ。お前は力も強いし、なんといっても雷電為右衛門の血が流れているんだからね」

　らいでんためえもん？

「昔、雷電為右衛門っていう偉いお相撲さんがいたんだよ。お前の遠い、遠い先祖になるんだ」

「お母さん、もう止めてください」とパパがおばあちゃんを止めた。

「雷電為右衛門があや子の先祖だっていうんでしょう。それはそうかもしれないけれど、あや子はもうここには帰ってこないんですから、新太郎にその話はしないでください」

　あや子が帰ってこないって、あや子ってだれのことかなあ、と新太郎はふしぎに思った。

　おばあちゃんは、もう一人いる。ここは埼玉県の住宅地なのだが、東京にパパのお母さんであるおばあちゃんがいる。このおばあちゃんはいつもおじさんたちとくらしているのだが、ときどき、新太郎の家にやってくる。来るときはいつもお菓子やおもちゃを買ってきてくれるので、新太郎はこのおばあちゃんの来るのを楽しみにしている。おばあちゃんは、新太郎をとてもかわいがってくれるのだ。

しかし、この二人のおばあちゃんは、仲(なか)がよくない。

「あや子さんが出ていったのに、いつまでここにがんばっているつもりですか？」と東京のおばあちゃんは、非難(ひなん)する。

「だって、新太郎のめんどうを見てくれる人がいなければこまるでしょう。次のお嫁(よめ)さんが来るまで、あたしがここで新太郎を育(そだ)てないと」

「前のお嫁さんの母親ががんばっている家に、次の人が来てくれるわけないじゃないですか」

「じゃ、新太郎のめんどうはだれが見るんです？」

「それは、私がやります。私が新太郎を東京につれて行って、育てます。そのうち、勝男も再婚(さいこん)するでしょうし」

勝男つまり新太郎のパパも、東京のおばあちゃんに賛成(さんせい)した。

「もうあや子も帰ってこないんだし、ぼくも新太郎をきちんと育てたいし」

そして新太郎は東京に行く。

東京まで、電車(でんしゃ)に一時間もゆられていくのだ。電車の中にはいっぱいお母さんにつれられた子どもたちがいる。

「ねえ、ぼくにはどうしてお母さんがいないの？」と新太郎は、日ごろからふしぎに思っていることを聞いてみた。

「それはねえ……」おばあちゃんはこまってしまった。

「新太郎ちゃんは、まだ小さいから、よくわからないんだよ。こんど、パパに聞いてごらん」

おばあちゃんはうまく逃(に)げた。

東京の家は、大きくて、おじさんたちが商売(しょうばい)をしている。おじさんはいそがしそうだが、おばさんは

やさしくて、いとこの康夫(やすお)ちゃんはよく遊んでくれる。でも、もう新太郎よりずっと大きいのだ。

　土曜日になると、パパがやってきてくれる。日曜日もいっしょにいてくれて、月曜日の朝早く帰ってしまう。なんだかものたりない。

　新太郎は思いきってパパに聞いてみた。

「ねえ、どうしてぼくにはお母さんがいないの？」

　パパはしばらくだまっていた。が、ようやく口を開いた。

「リコンしたんだよ」

「リコン？　リコンって何？」

「パパも結婚(けっこん)して、新太郎が生まれた。でも、まもなく、パパはお母さんとは離婚(りこん)したんだ。新太郎にはきのどくなことだったが、大人にはいろいろ事情(じじょう)があるんだ」

「ふうん……」

　新太郎はさびしかったが、不幸せではなかった。東京の家では、おばあちゃんもおばさんも康夫ちゃんもみな、親切にしてくれた。でも、この幸せは長く続かなかった。

　おばあちゃんは、病気になって、寝こんでしまった。ずっと寝ていて、苦しそうにしているおばあちゃん。新太郎は悲しくて、早く良くなってねと、おばあちゃんのひたいにぬれ手ぬぐいをあててあげた。

「勝男……」と、パパが来ると、おばあちゃんはパパを呼んで、

「私は新太郎のことが心配で……」

「お母さん」

「そればっかり心配なんだよ。早く良い人を見つけて、再婚してね。これ、私が亡くなったおじいちゃんに結婚するときもらった指輪(ゆびわ)だけれど、これを、新しいお嫁さんにあげてね。新太郎のことをかわいがってくれるように」と、自分の指から金の指輪をはずして、パパに渡(わた)した。

　それから、あわただしく人々が家を出入りする。なにか非常にさわがしく、お葬式(そうしき)が行われる。新太郎にはなんのことかわからない。

「おばあちゃん、どうしたの？　どこへ行ったの？」と聞くと、

「天国に行ったのよ」とおばさんが答える。

　天国ってどこだろう？　ここよりずっと遠いところだろうか？

　とにかくおばあちゃんはいなくなってしまい、新太郎はおばさんに育てられることになった。

　ぼくのまわりの人たちは、みんな、どこかへ行ってしまうんだ……と新太郎は悲しかった。おばさんはやさしかったけれど、新太郎の悲しみはもっと深いものだった。せめてパパがいっしょならいいのに、パパはやっぱり土・日にしか来ない。

　そんなある土曜日、パパが新太郎をむかえに来た。

「新太郎、おうちに帰ろう」

「えっ、ぼくもおうちに帰れるの！」

「そうだよ。これから、ずっとパパといっしょにくらそう」

　新太郎は、すっかりうれしくなった。東京のおばさんや康夫ちゃんたちと別れるのはさびしかったが、これからパパといっしょにくらせるのはすごくうれしかった。

　だが、また電車にゆられて、駅から歩いて家に帰ると、そこにはあの元のおばあちゃんではなく、別の女の人がいた。髪(かみ)の長い、目の細(ほそ)い、見たこともない女の人だ。

「お母さんだよ」とパパが言った。

　ちがう！っと新太郎は思った。お母さんと言われて、でも、幼(おさな)い新太郎にも、この人がお母さんなんかじゃないってことは、一目でわかった。

「新太郎ちゃん、これからよろしくね」とあいさつしてくれたが、この女の人は、どこかよそよそしいのだ。

「な、新太郎、これからお母さんと仲良くしなきゃだめだぞ」とパパは命令するが、新太郎は

不満(ふまん)だった。

　うそだ、お母さんじゃない、うそなんかいやだ、ほんとのお母さんじゃなければぼくはいやだ……新太郎はこの女の人を拒否(きょひ)した。うそなんか許せないから、パパの見ていないところで、この女の人をなぐったりけったり、乱暴(らんぼう)をした。

「帰れ！　帰れ！　お前なんか帰れ！」

　初め、乱暴をされても、この女の人はがまんしていた。新太郎に食べ物は作ってくれたし、買い物にもつれて行ってくれた。

　この町の大きなスーパーに、おもちゃが売られていた。

「ねえ、あれ、買って」

「あら、そんな高いもの」

「買って」

「だめよ、お金がないもの」

　女の人はおもちゃを買ってくれなかった。やっぱりお母さんじゃないんだ、と新太郎は思った。だから、それからは、どんどんこの女の人をいじめることにした。泣いて、わめいて、女の人の言うことなんかなに一つ聞かない。

　女の人は泣き泣き、出て行った。

　幼(おさな)い息子(むすこ)と二人、とほうにくれていたパパに、近所(きんじょ)のおばちゃんがたすけぶねを出した。

「あたしが新太郎ちゃんのめんどうをみてあげますて」

「ありがとうございます、もうどうしたことかと迷(まよ)っていたところなんです」

　父子(ふし)家庭(かてい)だということで、パパは新太郎を保育所(ほいくじょ)に入れることはできた。しかし、保育所は夕方までしか子どもをみてくれない。サラリーマンのパパには、保育所のおくりむかえもできない。それらを近所のおばちゃんに頼んで、パパはお金をはらうことにした。

保育所は、子どもが多く、いっぱいお友達(ともだち)ができて、楽しかった。でも、ここで新太郎は自分がみんなとちがうことを思い知らされる。みんなには、お母さんがいるのだ。お母さんは働(はたら)いていて、昼間は子どもを保育所にあずけているが、夕方になればちゃんとむかえに来てくれる。ぼくにも、お母さんがむかえに来てくれないかなあ、と新太郎は毎日まっていたが、来てくれるのはいつも近所のおばちゃんで、お母さんではなかった。

そんなある日、パパが新太郎をさそった。

「新太郎、動物園(どうぶつえん)に行かないか」

「動物園！」新太郎はうれしくて、こおどりした。

「うん！　ぼく、コアラが見たい！」

「コアラ？」パパはこまってしまう。

「新太郎、パンダじゃどうだ、パンダなら上野動物園で、ここから近いし、コアラのいる多摩動物公園(たまどうぶつこうえん)は遠いじゃないか。パンダにしようよ」

「いやだ！　コアラ、コアラがいい！」

新太郎ががんばるので、パパはしぶしぶおれた。

「そうかあ、じゃあ、多摩まで行くか」

新太郎は、保育所にあった絵本で、コアラのことを知っていた。コアラ、コアラ、コアラに会えるんだ！　新太郎はうちょうてんになった。次の日曜日が来るのをゆびおり数えて待っていた。

まちにまったその日、だが、おもしろくないことがあったのだった。

いくつも電車に乗って、やっと駅について、動物公園について、それっと思ったのに、パパは公園に入らず、入り口でぐずぐずしている。大勢(おおぜい)の人たちがコアラを見ようと入っていくのに、「ちょっとまてよ、新太郎」と言うばかりだ。何だろう、パパって、と思っていたら、遠くから「新太郎ちゃあん！」と呼ぶ女の人の声がした。

「ね、新太郎ちゃんでしょ」と女の人がやってきて、言う。

「ああ、よかった。ぼくは君と会えなかったら、どうしようかと思っていたんだ」とパパが安心(あんしん)したように言う。

なあんだ、パパと二人じゃなかったんだ。またちがう女の人か、と新太郎はがっかりした。

でも、三人でコアラ舎(しゃ)へ行く。

人が大勢でなかなか見れない。みんなコアラを見ようと必死なのだ。新太郎は、パパがかたぐるましてくれたので、人ごみの中からやっとコアラが見れた。でも、かんじんのコアラは、すやすやおひるねをしているようで、あいそのない動物だった。

帰りの電車もこんざつしていた。新宿まで三人で行く。

「コアラっていいなあ」と新太郎は思わず言った。

「あら、どうして？」

「だって、ぼく、保育所の絵本で読んだんだ。コアラはお母さんのおなかの袋にいて、お母さんに守(まも)られて大きくなるんだ。うらやましいなあ、ぼく」

「あら、そういうこと」その女の人は笑った。

「そんなこと、新太郎ちゃんだってコアラじゃないの。新太郎ちゃんだって、お母さんのおなかの中にいて、お母さんに守られて、大きくなったのよ。そうやって生まれてからは、お母さんに抱(だ)っこしてもらって、お乳(ちち)をもらって、育(そだ)ったのよ」

「うそだ」

「うそじゃないわよ。子どもはみんなそうして育つのよ。お母さんがいなければ子どもは生まれないから、お母さんのない子なんて、一人もいませんよ。ただその頃は新太郎ちゃんは小さかったから、おぼえていないだけ」

「……」

そうだろうか？　小さい頃、ぼくにもお母さんがいたんだろうか。新太郎は、遠い昔(むかし)、だれかに抱っこしてもらっていたような気がしてきた。まだなにもわからなかった頃、遠い遠い昔……。

しかし、パパはちがう女の人ばかりをつれてきて、ほんとのお母さんをつれてきてくれない

のだ。

　こんどの女の人は、丸顔(まるがお)で、背(せ)の低(ひく)い人だった。動物公園に行ってから、ちょくちょく家に訪(たず)ねてくるようになった。

「お母さんだよ」とまたもパパが言う。どうしてパパは、そんなうそばかりつくのか。

「お母さんは、ずっと病気だったんだ。だから新太郎と離(はな)れてくらしていたんだよ。今、病気がなおったから、帰ってきたんだ」

　そんなことあるわけないじゃないか。

　だが、その新しい女の人は、やがて新太郎たちの家にやってきて、いっしょにくらすようになった。

　あたまに来た新太郎は、やっぱり、その女の人をなぐったりけったりして、パパの見ていないところでうんといじめてやった。この女の人がいるからいけないんだ、この女の人がいなくなれば、ほんとのお母さんが来てくれるんだ。

「帰れ！　帰れ！」

「新太郎ちゃん、そんないじわるしないで」とこんどのその女の人は言い、出て行かなかった。

　そしてその女の人もスーパーへ買い物につれていってくれた。そこで、前の女の人が買ってくれなかったおもちゃがまだ売られていた。

「ねえ、このおもちゃ、買って」

「そんな高いもの」

「ねえ、買って」

「だめよ、今はお金がないから。パパがボーナスをもらったら、買ってあげるから、それまでまって」

「ああん、買ってくれないんだ」新太郎は泣いてしまった。

「わああん、わああん、わああん」と泣いた。お母さんがいないから、おもちゃも買ってもらえないんだ。新太郎はこれまでの悲(かな)しみ、さびしさ、苦(くる)しみ、自分の不幸のすべてをかけて、泣きころげまわった。スーパーの中で新太郎が大声で泣きころげまわってさわぐので、その女の人はすっかりこまってしまった。

「新太郎ちゃん、今はお金がないから買えない、パパがボーナスをもらったら買ってあげるって言っているのに、なんでそうわからないことを言って泣くの。お金がなければ買えないのよ」

「わああん、わああん、わああん」

新太郎は何十分(なんじゅっぷん)も泣き続けた。

「しかたないわねえ」ととうとうその女の人はおれた。

「いいわ、買ってあげる」

さいふの中の有(あ)り金ほとんど全部(ぜんぶ)はたいて、女の人はそのおもちゃを買ってくれた。

その夜、夕食のとき、パパが怒(おこ)った。

「なんでメザシなんかだ出すんだ」

おかずは、メザシと、一日前のほうれん草の残りだった。

「お金がなくて」

「お金がない！」パパは怒っている。

「お金って、ぼくは給料(きゅうりょう)、全部、君にあずけているじゃないか。家計(かけい)の管理(かんり)くらい、きちんとしろよ！」

「ごめんなさい……」女の人は泣き出した。

新太郎はあわてた。ぼくのせいだ、ぼくがわがままを言ったから、おかずがメザシになって、パパが怒っているんだ。女の人がほんとのことを言ったら、こんどはぼくがパパにしかられるんだ。……しかし、女の人はパパに新太郎のことは言わなかった。新太郎はほっとして、パパってひどい人だな、と少し思った。

　その女の人が親切だってことは、幼い新太郎にも少しわかってきた。昼間、新太郎は保育所にあずけられている。保育所はお友達がいっぱいいるから楽しいのだけれど、朝、朝ごはんを食べてパパを送り出すと、新太郎は保育所に行くより、この女の人といっしょに家にいたいような気がする。

「おなかが痛(いた)い」とぐずつくと、

「そう？　じゃあ、保育所、休(やす)む？」と女の人が聞く。

「うん」

　でも、おなかなんか痛くないのだ。

　新太郎は女の人とお話ししてすごす。

「ねえ、天国って遠いの？」

「天国？　なんで？」

「東京のおばあちゃんが天国に行ったって、みんなが言うんだ。ぼくも天国に行っておばあちゃんと会いたいな」

「新太郎ちゃん、それはだめよ」

「えっ、どうして？」

「どうしてって、天国に行ったら、もう二度と帰ってこれないのよ。パパにも会えなくなるし」

「えっ、パパに会えないの？」

「そうよ。それに、天国にはおもちゃもおかしもないし、なんにもすることがなくて、たいくつなのよ。天国って、とってもたいくつなところなんだから」

「ふうん」

つぎつぎ

「新太郎ちゃんはかわいそうね。めんどうを見てくれる人が次々（つぎつぎ）となくなって」

「ぼくのお母さんも天国にいるの？」

「えっ、それはちがうけれど……」

「ぼく、どうしてお母さんに会えないの？」

「それはねえ……」

　女の人はこまっていた。

「ぼくもみんなみたいにお母さんとくらしたい」

「そう……でも、だめなのよ」

「どうして？　どうしてぼくだけお母さんといっしょになれないの？　パパはお母さんをつれてきてくれないんだ」

「それはできない相談（そうだん）だから」

「できないって、どうして？」

　女の人はしばらくだまっていた。そしてほんとのことを言ったのだった。

「新太郎ちゃんを生んだお母さんは、もう他の男の人と再婚して、別の赤ちゃんを生んでいるの」

「ええっ！」

　新太郎はおどろき、怒った。別の赤ちゃんだなんて、ぼくが、ぼくってものがここにこうしているのに、なんでお母さんは別の赤ちゃんなんか生むんだ！

　新太郎はわんわん泣いた。

「かわいそうにねえ」

女の人は泣いている新太郎の頭をやさしくなでてくれた。

「でも、お母さんは、新太郎ちゃんのことをきらいになったわけではないのよ。それはわかってね。お母さんは、パパのことを好きでなくなったのよ」

「えっ、どうして？　どうしてパパのことを好きでなくなるの？　パパはやさしいじゃないか」

「そうね、でも……」

女の人はまた、だまって考えていた。やがて言った。

「パパは、うそつきなのよ」

「えっ？」

「結婚するとき、パパは言ったわ、今は新太郎が小さいから、家にいてほしい、でも、新太郎が大きくなったら、働いてもいい、働いてくれたら家事はぼくが半分するからって。でも、そのことを結婚しているお友だちに言ったら、みんな、笑ったわ。そんなのうそだって。男の中にはそんなうそをつく人もいるけれど、共働きしたって、男は家事なんかやらないって。パパもそうよ。新太郎ちゃんのお母さんも共働きしていたけれど、パパは手伝ってやらなかった。お母さんは、おばあちゃんがいっしょにくらしていたから、その分、楽だったけれど、やっぱり家事や新太郎ちゃんのせわがあるじゃない。大変だったのよ、お母さん。それをわかってくれないパパ。お母さんの心は、だんだん、パパから離れていったのね。そして出ていったのよ」

「……」

「新太郎ちゃんは、大きくなったら、お嫁さんをうんと大事にするのよ。大事にするって、愛しているよとかと口で言うことではないのよ。お嫁さんは、家の仕事や子どものせわで大変なんだから、できるだけ手伝ってあげるの。子どものせわは、いっしょうけんめいしてあげるのよ。そしたら、子どもも、幸せになれる」

「うん……」

「それに、私は、パパのことで、どうしても許せないことがあるの」

「えっ？　それ、なあに？」

「それは、新太郎ちゃんを生んだ人の写真が一枚もないってこと。どこかにあるんじゃないかって、私は

いろいろ探したけれど、写真はいっぱいあっても、お母さんの写真は一枚もなかったわ。赤ちゃんの新太郎ちゃんをお風呂に入れたり抱っこしたりしている写真も、お母さんのところは切り取ってあるの。そんなのってあるかしら。そりゃあ、パパにとっては自分を裏切った妻かもしれない。でも、新太郎ちゃんにとっては、たった一人の生みのお母さんなのに」

「……」

「私がやきもちをやいたって、そんなこといいじゃない。私だって、結婚するのは初めてだったけれど、その前に他の男の人を好きになったことは一度もないなんて言わないわよ」

「……」

　新太郎がこの人を「お母さん」と呼べるには、まだだいぶ時間がかかった。それでも、現実は受け入れなければならない。新太郎の人生、パパとこの人と自分の家庭。それをようやく新太郎は受け入れる気持ちになったのだった。

了